

りんのちから

- 育苗期に使用するとリン酸を吸う力の強い体質ができる。
- チッ素をムダなく利用しチッ素過剰になりにくい。

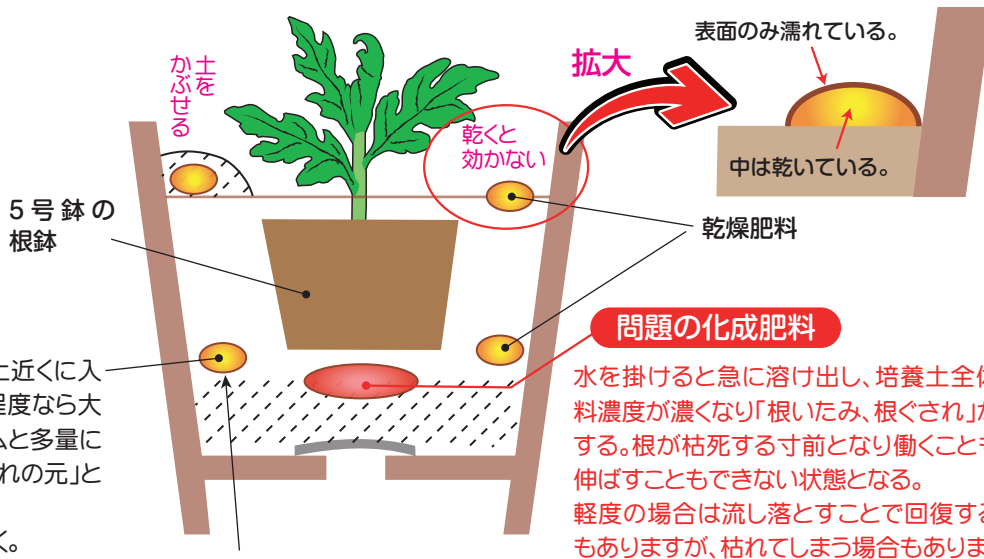
失敗だらけの菊づくり。思いあたるところはありませんか！！ こんな使い方してませんか？ その原因は ……

定植時、肥料切れが起きないように念の為に入れた化成肥料が悪さをする

5号鉢では最高の出来映えだったところが定植して10～15日たったのに一向に元気にならない。生長が止まってしまった。
定植をする時に乾燥肥料は「菊養源6-6-5」を約30グラムを入れて植えた。上にも同様に置いた。
変だと思い鉢から抜いて見たら全く根が伸びていない。
5号鉢の根鉢のままであると言う。
定植に使用した培養土に問題があるとクレームがつかれました。しばらくして「葉っぱが黒くなってきた」「幹は太らないし、葉っぱも大きくはならない」今度は肥料もおかしくないかとクレームがつかれてきた。
他社の製品は使ってないとの事であった。
当社の肥料を使用した場合は、「葉っぱが黒くなる」この症状が発生することはありません。
これは化成肥料を使用した場合の特徴的な生育ですか

ら、他社の肥料は使用していないと言っても使っていることは明らかです。
よく聞いてみると乾燥肥料と液肥は当社のものですが、定植時に化成肥料を鉢底に置いたとのことでした。
化成肥料は乾燥肥料ではない為、計算には入ってなかったのです。しかも入れた量は乾燥肥料と同様に大サジ3～4杯という量が入れてあったわけです。
肥料成分は乾燥肥料の2～3倍も含まれ、しかも、水を掛ければ一気に溶け出します。
培養土中の肥料濃度は急激に高まり、根が耐えられる状態ではなくなってしまいます。
この問題の原因は乾燥肥料は鉢の中段に多く入れると問題が発生することの認識はあったわけですが、化成肥料は乾燥肥料ではない為、関係はないと考えていたようです。

効いているつもり。でも効かない。



ここに入れる乾燥肥料も表土近くに入れる1回分の30～50グラム程度なら大丈夫ですが、100～200グラムと多量に入れるのは「根いたみ、根ぐされの元」となる為、止めた方が良いでしょう。
表土近くに置いてもしっかり効く。
こちらの方が失敗がない。
この失敗は非常に多い。

ここに入れたら表土の方は2週間後に追肥として置く。

水を掛けると急に溶け出し、培養土全体の肥料濃度が濃くなり「根いたみ、根ぐされ」が発生する。根が枯死する寸前となり働くことも根を伸ばすこともできない状態となる。
軽度の場合は流し落とすことで回復する場合がありますが、枯れてしまう場合もあります。

肥料の与え過ぎは障害の元

肥料は多く与えれば与える程よく効くものではありません。
ある一定の量までは増やすことでよく育ちますが、それ以上に与えるとだんだん生育が悪くなり、やがて枯死します。
液肥についても同様です。“液肥は別だから”は通用しません。



腐葉土づくりでの米ヌカの入れ過ぎ

培養土配合時の乾燥肥料の添加で起きる生育不良

毎年、この時期になると来る質問があります。「鉢上げたんだけど生長が悪い」「芽先が少し茶色くなってきた」この原因は腐葉土づくりや培養土を作る過程で米ヌカ、油カス、乾燥肥料などを入れ過ぎた場合にチッ素過剰の培養土ができてしまいます。肥料濃度が高まる為の肥料障害が発生します。挽回する為には“根いたみや根ぐされ”を発生している

為になかなかむずかしいこととなりますが「エストール」「ランドライフ」により培養土の肥料濃度を下げて新根の発生を促し、根の回復を待つて正常な肥料管理にもどすことを考えるしか方法はありません。

回復したとしても生育が遅れてしまう為、優秀花は望めません。

配合肥料で菊づくりができますか？ 配合肥料の問題点

未発酵の有機肥料と化成肥料の障害をダブルで受ける

配合肥料とは化成肥料に有機肥料が配合されています。有機肥料が配合されていれば化学肥料より良いだろうと思われがちですが、これが大間違いです。化成肥料は「葉っぱがドス黒くなったり」「葉が巻いたり波打ったり」およそ品のある菊には育ちません。配合されている有機肥料は未発酵の有機肥料ですから水を掛ければ鉢の中で発酵が始まり発熱する。また発酵する時に発生するガスによる「根いたみや根ぐされ」の問題が発生します。また発酵する時にチッ素分を必要とする為培養土中のチッ素分を横取りする為、生育が停滞するなど、菊を育てる上で都合の悪いことが起こります。

これが配合肥料の姿です。

農家が配合肥料や有機肥料を使用する場合は前もって畑にスキ込んでおき、発酵が終わり、この障害が起きなくなるまで待つて作付けをしています。

この種の肥料（発酵していない有機肥料）を鉢の中に施したら何が起きるか知った上では使用することはないと思います。

ところが配合肥料を使用するように指導している会があると聞いたことがあります。秋の菊花展には哀れな菊がならぶという話もお聞きしたことがあります。

化学肥料の問題点は前段に述べたとおりです。

本物の菊の肥料は有機肥料を材料に発酵した肥料です。

これが乾燥肥料です。有機肥料はタダの材料にすぎません。

“その肥料は未発酵だから使えないよ”と話したことがあります。バブル時代の値ついで、おどろきの高価格の肥料です。そのままでは使えないから粉にして発酵して使っていると返事が返ってきました。

正解・大正解です。これが菊づくりに使用する乾燥肥料です。しかし、臭いをともなう“発酵”は今時どこでもできるものではありません。

そこでおすすめしたいのが発酵した有機肥料、すなわち本物の乾燥肥料です。

有機肥料を発酵する目的は施した後に発生する障害の回避です。使えば必ず障害がでる。程々咲いても優秀花にはならない。

菊づくりや鉢・コンテナなどでの栽培は畑とは違い植物が植えてある状態で施肥する為“発酵済”の条件は絶対的なものです。

ホームセンター等では菊づくりに耐えられるような肥料は売られていないのが現状です。

失礼を承知の上で書かせていただきますが“ホームセンター品質”と言われる安価な商品を、大幅値引きして大量に販売するのがホームセンターです。

そこで最高の品質を求められる菊づくりの“土や肥料”を買いに行っても簡単には見つかりません。元々このような販売形態には乗らない商品です。奥が深く商品は説明が必要となり、扱う力のないのがホームセンターです。

利用できるのは、赤玉土、鹿沼土、軽石等々単純な品質にあまり関係のない商品のみです。

当社製品を取り扱っているホームセンターも全国に数店ありますが、相談販売のできる例外のお店です。



これから起こる葉の巻き込み・タレ下がり チッ素過剰にしない為の肥料の使い方

米ヌカを入れ過ぎた腐葉土、油カスや乾燥肥料を混入した培養土の使用や肥料の与え過ぎ、チッ素の多すぎ等バランスの悪い肥料を使用すると葉が黒くなったり、巻き込みが起きます。早ければ7月・8月には現れてきます。チッ素過剰の状態を長く放置しておくことはできません。チッ素濃度が高く根毛の発達が阻害され「チッ素は吸えてもリン酸が吸えない」状態になっています。チッ素濃度を下げる必要があります。チッ素濃度が下がれば根毛が再生されます。根毛が発達すれば、リン酸の吸収が高まり、チッ素の消化が改善され、チッ素過剰の解消が進み、正常な生育に改善されます。この方策としては軽度の場合はリン酸とカリの肥料（PK、マグ）を与えることで改善されますが、重度の場合は「エストール」又は「ランドライフ」で肥料除去をし、チッ素分を下げ、根毛の発生を促すことが最善の方法です。

根毛の発達がよければ、追肥の際もリン酸の吸収が正常になる為、チッ素過剰は起きにくくなります。生育途上に発生するこの問題を無視して肥料を与え続け、さらに追込肥も与えたとなると、秋の肥料調整は極めて大変なことになります。この「肥料調整剤」は効かないと言うことになります。実際には生長期の無管理に近い肥料の使い方には問題があるわけですが「肥料調整剤」を悪者にしてしまう話が聞こえてきます。これで済ませてしまうと「菊づくりの上達」はなくなってしまいます。ご自分では気がつかない場合が多いので、迷ったら早めに質問してください。解決の糸口が見つかる場合が多く、多くの愛好家の皆様がワンランク上の菊づくりに移行しています。

このように使えば効果的 乾燥肥料の使い分け

		苗づくり	元 肥	追肥	追い込み肥
盆 養	厚物	りんのちから	菊養源 6-6-5 又は 名彩輝	←	アミノパワー
	管物	りんのちから	りんのちから	←	
ダ ル マ	厚物	りんのちから	アミノパワー 又は 菊養源 6-6-5	←	アミノパワー
	管物	りんのちから	りんのちから	←	
福 助	厚物	りんのちから	アミノパワー 又は 菊養源 6-6-5	←	アミノパワー
	管物			←	
ス プ レ ー 菊		りんのちから	りんのちから	←	

※「こうすればよい花が咲く 肥料の使い方」もご覧ください。

※菊養源 6-6-5 は全面バラまきで追込肥にも使えます。

※苗づくりで「りんのちから」を使用している場合

追肥はひかえめに与えて下さい。
特に止め肥はひかえめに与え追い込みで調整して下さい。
追肥（液肥乾肥を含め）がムダなく利用されますのでその分肥料に少なめで間に合います。

その結果、葉の黒く、葉のフチが波打ちボテッとタレ下がった肥満体の木づくりは出にくくなります。
ひきしまったアスリートの木づくりとなり、花の肥大や花形がよくなる可能性が高まります。

肥料調整と肥料除去を考える

菊づくりでは「肥料抜き」や「チッ素抜き」などと言われています。肥料調整ができないほど肥料を与えてしまう方が非常に多くいます。その根底には肥料は「与えれば与える程良く育つ」の考え方があります。また生育は「チッ素だ」のチッ素偏重の考え方も根強く残っています。これではチッ素過剰の生育をするのは当然の結果です。「葉が黒くなる」「葉が巻く」「タレ下がる」「花の肥大が悪い」「花弁が乱れる」などなどが現れます。この様な結果にならない為に肥料調整や肥料除去するわけです。当社としては問題解決の為に肥料調整剤（PK・マグ）

や肥料除去剤（エストールやランドライフ）を発売しております。そして肥料調整や肥料除去の重要性を「かわらばん」や機会のあるたびに訴えてきました。最近では過肥栽培やチッ素過剰の肥料の与え方は少しずつ変わってきたように思いますが、依然としてこの様な肥料の使い方をされている方が多く見受けられます。実際に注文をいただく数量からも推察できます。今年も定植が終わり、そろそろこの様なチッ素過剰の状態が発生する時期になってまいりました。そこで肥料調整剤（PK・マグ）、肥料除去剤（エストールやランドライフ）の出番が増えてまいります。特に問題となるのは生長期（8月まで）に於いてチッ素過剰症を放置のまま秋の肥料調整を迎えた場合です。

PK.マグ・エヌトール（ランドライフ）の効果的な使い方

どちらの資材も8月までの生長期と秋の肥料調整と分けて考えた方が効果的であり、わかりやすいと思います。

まず8月の生長期に於いて

「葉色が濃くなってきた。まだ縁が波打つところまでには至っていない」

この状態を発見したらすぐ PK. マグを大サジ1～2杯（15～20グラム）を表土全体に散布し、チッ素分の消化を促し、健全な生育を促します。

この時に自然にチッ素の消化が進み、葉色が明るくなるようなら健全な生育ですから肥料調整は必要ありません。

「葉っぱが黒くブ厚くなってきた」「葉が巻いてきた」などの現象が現れてきた。

これはかなり多くチッ素を吸い込んだ状態で、そのまま放置はできません。チッ素過剰も重症と考えた方がよさそうです。

この場合はエヌトール（又はランドライフ）で一度鉢土の肥料を除去し、肥料濃度を下げます。

500倍で水にうすめ、1鉢当たり2～3リットル掛け、しばらくしてから水5リットル程度を掛け流し、肥料分を鉢外に流し落とします。

こうして根の働きやすい環境を整え根毛の再生を促しま

す。（肥料濃度が高まると根毛が傷害を受けていることがほとんどです）

肥料除去が終了したら、PK. マグを大サジ1～2杯（15～20グラム）を与え、茎葉にたまっているチッ素分の消化を促し、健全生育に戻します。

この様な気配りや神経を使うのは面倒。状態の判断も難しいと考える方は定期的に（10～15日間隔）エヌトール（ランドライフ）を使用する方法もあります。

一定以上に鉢土の肥料濃度が上がらないように管理する方法です。

うすめ倍率は同じですが、掛ける量は2～3リットルです。次の水掛けの時に液肥を与えると肥料濃度が下がり、根の働きが高まっている為、肥料の効きめは非常に高くなります。

その為に、エヌトールは肥料を除去するものではなく肥料を喰わせるモノだと言う方もいます。

肥料を多めに与える方には最善の使い方かもしれません。

こうして生長期に於いて適正な鉢土の肥料濃度が保たれ、健全生育をしていれば秋の肥料調整は非常に円滑に進められると考えます。

菊つくりの方向性を見失わない為の方策

誰でもご自分で作った腐葉土や培養土は適切であると考えています。そこで購入した肥料を使い、失敗が出れば「この肥料が悪い」とその責任を転嫁する。そして次々と肥料を変える、しかし同じ結果となる。

そこで“土かな”と考えるようになる。

こうなると信じられる基本になる資材を見失っている為

迷路に入り込み失敗をくり返すこととなります。

菊仲間聞いても本当のことを教えてくれるとは限りません。

そんな場合のおすすめの方法は原点にもどり、基本どおりに腐葉土を作ることです。

（腐葉土の作り方 培養土の作り方は資料がありますのでご請求下さい）

そして使用する肥料は“りんのちから”です。これでサシ芽と植え方が間違いがなければ順調に生育します。これを基準に次に使用すべき肥料を考えていけば、もし、間違えても戻って出直すことができる為、やがて本物の菊花を作ることができると思います。

もうひとつの方法は「菊養土育苗用」を購入いただき、肥料は「りんのちから」を使い試作してみてください。

必ず最良の結果が得られると思います。

—— **この種の基本的な問題はお電話いただければお役に立てると思います。** ——

こんな話もあります…未発酵の有機肥料のトラブル

有機肥料を売っているメーカーの販売員の説明ですが、「施肥したら鉢の中で熱がでてきた。発酵してあるのか」の質問に対し「水を掛ければ熱は下がるので問題ない」と答え、吊し上げを食らった話を聞いたことがあります。水を掛けたから発酵が始まったわけだから、水を掛ければ一時的に熱は下がっても、ある程度発酵が進むまで2

～3週間は発酵は続きます。

未発酵の有機肥料を乾燥肥料に見せかけて販売するメーカーの無責任な姿勢が端的に示されています。

有機肥料も歴とした肥料なのですが“発酵”のひとつ手間を手抜きにした為に発生したトラブルです。

お申込み・お問い合わせは

ウチダケミカルコーポレーション

Tel.029-869-1777 Fax.029-869-1666

〒300-4204 茨城県つくば市作谷1711-12 郵便振替 00820-6-96628